

幼児・児童の感情発達における 社会的表示規則と向社会的行動 —その概念と研究のレビュー、および展望—

本間(樋掛) 優子¹⁾・内山伊知郎²⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科
2) 同志社大学心理学部

Social Display Rules and Prosocial Behavior in Emotion Development of Children

—Its Concept and Review, and Perspectives for Future Research—

Yuko Honma¹⁾(Hikake), Ichiro Uchiyama²⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY
2) DOSHISHA UNIVERSITY DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY

キーワード

幼児・児童、社会的表示規則、向社会的行動

Key words

children, social display rules, prosocial behavior

I はじめに

1. 問題と目的

学級崩壊やいじめ、非行の低年齢化など、子どもの行動上の問題は長年取り上げられている。特に、小・中学校における暴力発生件数は、平成20年度、調査開始以降最も多かったことが報告されている¹⁾。私たちは学校や職場などで社会生活を営む際に、自分の気持ちを常にそのまま表現するわけではなく、適切に統制することが必要であるが、暴力行動といった問題行動の背景には、適切に自分の気持ちを表現したり、統制することへの困難さ²⁾がうかがえる。

文部科学省の「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査結果」²⁾によると、「わたしはいろいろしている」では約4割、「急にこったり、泣いたり、うれしくなったりす

る」では、6割から7割の児童が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。この結果から、児童が学校生活において不快な感情を適切に処理できなかつたり、感情を適切に統制することが難しい様子がうかがえる。そしてその数は決して少なくなく、特定の児童に限らず数多くの児童が、感情統制について難しさを感じていることが明らかとなった。

自己の感情表出を統制することは、他者との関係を良好に保つために必要なことである。ゆえに、感情統制は子どもが社会化されていく過程の中で、重要な要素であるといえる。感情統制は、感情発達に関する研究の鍵概念の1つとして位置づけられ、感情(情動)の喚起や反応を何らかの形で制御する過程を指す語として用いられている³⁾。

また近年、いじめは悪質化し、いじめた側

が逮捕されるケースも増加している。携帯電話やメールを使ったいじめも急増している。このように、子ども同士のいじめの問題が社会で大きく取り上げられているが、原因として「他者の立場になって考える」、「他者の感情を感じ取る」といった、他者に対する感情理解能力の欠如が背景にはあると考えられる。さらに、感情理解能力は、向社会的判断や向社会的行動と関連があることが明らかになっている⁴⁾。

そして、子どもの向社会的能力の発達には、適切な感情統制を子どもが用いることができ、さらに自身の感情について理解できているかどうか、ということが重要である⁵⁾。このことから、児童期における向社会性の発達には、感情発達の中で、感情統制と感情理解という2つの要因が大きく関わっていると考えられる。幼児期および児童期における向社会的な能力の発達は、成人期の適応にも関連するので極めて重要な研究領域である⁶⁾。また、園田⁷⁾や星⁸⁾が指摘しているように、感情統制の発達のメカニズムを明らかにするためには、幼児期から児童期にかけての研究が必要である。そこで、本研究では幼児期から児童期における感情発達に関する研究の中で、特に感情統制と感情理解という2つの側面から、これまで行われてきた主要な研究についてレビューを行うこととした。

2. 方法

文献研究の方法については、以下のように行った。

まず、日本語文献については、CiNiiを使用し、「児童」、「感情」をキーワードに含む論文について検索を行った。その結果、613件の研究がヒットした。その中で、「感情表出」がキーワードにある論文19件、「感情理解」がキーワードにある論文8件、「向社会的行動」がキーワードにある論文33件を抽出した。英語文献については、PsycINFOを使用

し、「Child」「Display rule」をキーワードに含む論文を検索した。その結果、88件の論文がヒットした。その中でさらに、「Prosocial behavior」をキーワードに含む論文7件を抽出した。このようにして得られた研究の中から、以下の基準を設け、その後のレビューの対象とする研究を選択した。

(1)実験および、質問紙による調査研究を実施している。

(2)先行研究の追試ではなく、新しい知見が述べられている。

さらに、抽出した論文に引用されていた論文で上記のキーワードにヒットせず抽出されなかったが、本研究の目的に一致する論文については、その論文の原文にあたった。

II 感情の社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動

1. 感情の社会的表示規則 (Social display rules) – その概念と研究のレビュー –

これまで、幼児期から児童を対象にした感情統制に関する研究では、感情(情動)経験自体の表出の統制に関する研究よりも、仲間や友人関係に関わる感情表出の統制に関する研究が、主流となっている⁹⁾。従来の研究では、感情表出の統制の獲得過程は、「社会的表示規則 (Social display rules) の獲得過程」として捉えられてきた¹⁰⁾。社会的表示規則 (Social display rules) とは、与えられた状況に対し、社会的に適切な感情表現をすることと定義される¹¹⁾。これは、“子どもが、社会的な慣習に従って、自分の感情表出行動の表示 (display) をモニターしたり統制したりする (regulate) することを学ぶ”¹²⁾ ことである。

社会的表示規則 (Social display rules) については、多くの研究ではがっかりする状況 (例えば、期待はずれの贈り物を受け取ってがっかりした時に、相手の気持ちを考えて嬉しいふりをする) や、痛みや悲しみ、怒り、

というようなネガティブな感情の中で、子どもがどのように社会的表示規則 (Social display rules) を用いるかについて、検討されてきた。⁶⁾

社会的表示規則 (Social display rules) に関する一連の研究は、Saarni¹²⁾から始まる。Saarni¹²⁾は、児童 (6, 8, 10歳児) を対象に “期待はずれの誕生日プレゼントをもらう” などの、感情を制御する必要のある仮想場面 (4話) を提示して、例話の主人公がどのような表情ををすると思うか、およびその理由をたずね、感情表出のルールが発達について検討している。その結果、年齢が高まるにつれて、社会的表示規則 (Social display rules) を多く用いることが示されている。また、Saarni¹¹⁾は、実験者の調査 (算数などのワークブックの難易度を調べる) に協力したお礼をあげるという実験という手法からも、社会的表示規則 (Social display rules) について検討している。魅力的なお礼としては、例えば、お菓子とお金、期待外れのお礼としては、例えば、赤ちゃん用のおもちゃを設定し、実験を行っている。その結果、魅力的なお礼をもらうときには、どの学年の児童 (6, 8, 10歳児) もポジティブな表情を示すが、期待外れのお礼をもらうときには、ネガティブかニュートラルな表情を示す児童が多く、10歳児の女の子のみが、つまらないプレゼントをもらったときにもポジティブな感情を多く表出していることが示された。実際の実験場面では、仮想場面を用いた実験と結果は異なり、性差が認められることが明らかとなった。

また、期待外れのお礼をもらったときにも相手に笑顔を見せるというような本当の感情とは異なる感情の表出は、発達の見ると3, 4歳頃から可能になる。¹³⁾しかし、3, 4歳児はまだ、表出された感情と本当の感情を意識的に区別できず、単に「プレゼントをもらったときは、いつも笑顔を見せる」という社会的表示規則 (Social display rules)

に従っているだけである。¹⁴⁾さらに研究は、「人は本当の感情とは異なる感情を表出することがある」ということを、子どもが認識しているかどうかには焦点があてられるようになった。

Harris¹⁵⁾らは、Saarni¹²⁾の実験パラダイムを4歳児向けに修正し、幼児 (4歳、6歳) を対象にした実験を行った。Harris¹⁵⁾らが使用した課題では、主人公がポジティブまたはネガティブな感情を感じていながら、その表出を抑制しようとする8つの場面が設定されている (例えば、主人公はおかしな服を着たおばあさんを見たが、怒らせるといけないので自分の気持ちを隠そうとしている：ポジティブ感情の表出抑制、主人公は転んだが、友達に笑われたくないので、自分の気持ちを隠そうとしている：ネガティブ感情の表出抑制)。ストーリーの提示後、主人公の本当の感情と、見せかけの感情 (どんな顔をしようとしていたか) について質問をし、参加児は主人公の本当の感情と見せかけの感情について、「喜び」「悲しみ」「普通」の表情図の中から選択し、その選択について理由づけすることを求められた。その結果、6歳児は4歳児とは異なり、見せかけの感情と本当に感じている感情を区別し、さらに適切な理由づけができることが示された。

Harris¹⁵⁾らの研究をきっかけに、社会的表示規則 (Social display rules) に関し、子どもの理解を調べる研究が多く行われた。それらの研究のほとんどが4歳から6歳の間に見せかけの感情と本当の感情の区別が可能になるという、一致した見解を示している (例えば、Banerjee & Yuill¹⁶⁾、溝川¹⁷⁾など)。そしてその後も発達は続き、児童期に入ると幼児期に比較し、教師、友人とのやりとりといった、さまざまな社会的な経験の増加に伴い、感情に関する知識も増え、理解もより深まる。また、感情表出を統制しようとする動機についての理解も深まっていくことが明らかになってい

¹⁸⁾る。

感情表出を統制する動機は、自己に対する他者からの評価が下がってしまうことを避ける、相手をがっかりさせてしまうことを避けるなど、その場面や状況によって異なり、これまで感情表出を統制する動機は「自己防衛的動機」と「向社会的動機」の2つに大きく分類され、研究が行われてきた。¹⁹⁾

²⁰⁾樟本らの研究では、従来の自己に生じた感情を状況に応じて制御するという、社会的表示規則 (Social display rules) の使用とは異なり、他者に生じている感情に応じて、自己の表情を制御するかという、逆の方向から社会的表示規則 (Social display rules) の使用について調査している。内容としては、小学1年生、3年生、5年生に対し、課題として外的表情と内的表情図を用いている。外的表情図は、喜び、悲しみ、怒り、ニュートラルの4種であり、内的表情図は、顔の輪郭だけ書かれた主人公の胸部に、主人公の内的表情を示す表情図を用いている。物語課題としては、怒り、悲しみ、喜びに関する物語が各々2種類であり、使用する物語課題場面において、友人の感情に合わせた外的表情を自分が表出することができるか、そして、その理由を検討している。理由については、①向社会的②自己保護的③規範の維持④無関係⑤非共感⑥その他から選択させる形式をとっている。結果としては、1年生よりも3年生、5年生の方が、より多くの社会的表示規則 (Social display rules) を使用していることがわかった。また、理由については、感情の種類の違いによって、友達感情表出に合わせて表情を統制する理由づけに差異があることが小学1、3年生では明らかになった。

¹⁹⁾Gnepp & Hessはこれらについて小学1年生、3年生、5年生を対象に発達的な変化を検討し、社会的表示規則 (Social display rules) は児童期の間に加齢に従って理解されるようになること、また子どもにとって自己

保護的な動機に基づいた表情表出ルールよりも、向社会的動機に基づく感情表出ルールの方がはやく理解されることを示した。平林・¹⁰⁾柏木の研究では、自己防衛動機によって感情表出を統制すると理解している子どもは仲間からの評価が低いという結果が得られている。また、向社会的動機によって感情表出を統制すると理解している子どもは、仲間から受け入れられており、教師評定による社会的コンピテンスも高いことがJonesらの研究²¹⁾によって明らかになっている。

近年、児童期における社会的表示規則 (Social display rules) の使用と向社会的行動の発達に関する研究^{22) 5) 11)}がなされている。このように、人が意図的に感情表出を調整し得ることについて理解する能力は、他者との感情的な関わりを持つ上で重要な感情コンピテンスの1つであると考えられている。よって、次節では児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連についてレビューしていくこととする。

2. 児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連

児童期における向社会的行動について検討するにあたり、年齢による子どもの生活環境の相違に留意する必要がある。幼児期と児童期の大きな相違点として、児童期は家庭に加え、学校生活が大きな割合を占めるようになる。それに応じて学校生活での教師や友人との関係が子どもにとって重要になってくる。一般的に、社会的表示規則 (Social display rules) を上手に用いることができ、ポジティブな感情を示す子どもは、教師や友人から社会的コンピテンスがあると評価されやすい。²⁴⁾具体的には、攻撃性が少なく、引っ込み思案ではなく、より向社会的で、社会的コンピテンスがあるとみなされる。²⁴⁾

児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動について検討さ

れた研究は、幼児期を対象にした研究に比べると、数が少ない。しかし、学校生活を円滑に送る上で、社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連について明らかにすることは、非常に重要であり、多くの研究で、対人関係と感情表出に関する理解は、10歳前後にそれ以前と質的に異なる発達段階に至るという結論が導きだされている^{25) 26)}。そこで、本稿では児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連に関する研究について、主要な研究についてレビューを行う。

社会的表示規則 (Social display rules) の測定には2種類あり、仮想場面 (例えば、Saarni¹²⁾に類似) を用いて社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動について検討された研究では、初期ではUnderwood²⁷⁾ら、Garner²⁸⁾の研究を挙げることができる。また、実験場面 (例えば、Saarni¹¹⁾に類似) を用いた研究では、McDowell, O'Neil, & Parke⁶⁾を挙げることができる。

まず、仮想場面を用いた研究からみていくと、Underwood²⁸⁾らは、8歳から13歳までの子どもに対し調査を行い、社会的表示規則 (Social display rules) の知識の欠如が、攻撃性と関連することを示した。

Garner²⁸⁾は、小学3、4年生に対し、感情に関する知識に関する課題として、(1)感情的視点取得能力 (Emotional role-taking)、(2)感情的/道徳的帰属 (Affective/Moral Attributions) に関する知識、(3)社会的表示規則 (Social display rules) の3つについて測定し、それらと子どもによる友人関係の質、教師に評定よる子どもの向社会的行動の関連について検討を行った。

感情的視点取得能力 (Emotional role-taking) については、子どもに仮想場面の物語を10個提示し、主人公がどのような感情を感じるかについて選択させるものである (例えば、誕生日なのに悲しい顔をしている主人

公について、主人公の気持ちや、どんな状況かについてたずねる。主人公の気持ちについては、喜怒哀楽の表情図からも選択させる)。

感情的/道徳的帰属 (Affective/Moral Attributions) に関する課題では、主人公(A)が困難 (恥ずかしい思いをしたり、いじめられたり) に遭遇するが、もう一人の子ども(B)がからかったり揶揄する仮想場面の物語を8つ提示し、その後子どもに3つ質問 (なぜ、Bはそのような行動をしたか、Bはどのように感じているか、Bはどのように感じて、Aをからかったり揶揄したか) をしている。質問に対する回答 (感情の帰属) について、共感性、愛他性、自責、攻撃性、否認についてそれぞれ0~8点で評定された。

社会的表示規則 (Social display rules) については7つの仮想場面が提示され、それぞれに対しどのような感情を表出するかが測定された (Saarni¹²⁾のプレゼント課題に類似の課題が用いられている)。友人関係の質、教師に評定よる子どもの向社会的行動については、質問紙評定が行われた。

結果として、感情の帰属に関する課題では、攻撃性と否認による帰属の高さは、ネガティブな友人関係と関連があり、子どもの向社会的な行動は、感情的視点取得能力と向社会的な動機による社会的表示規則 (Social display rules) の使用を予測することが明らかとなった。

Garner²⁹⁾は縦断研究も行っており、5歳児に対し、表情に関する理解 (Knowledge of facial expressions、例えば、“嬉しい”という言葉に合った顔の表情を選ぶ)、感情が引き起こされる状況の知識 (Knowledge of emotion-eliciting situations、例えば、喜び、悲しみ、怒り、恐れ、驚きといった感情が喚起されるVTRを視聴させ、子どもがその状況について理解できているかを評定する)、感情的視点取得能力 (Emotional role-taking、例えば、

誕生日なのに悲しい顔をしている主人公について、主人公の気持ちや、どんな状況かについてたずねる。主人公の気持ちについては、喜怒哀楽の表情図からも選択させる)を測定し、同被験者に対し、4年後、小学校中学年のときに社会的表示規則 (Social display rules、動機についても自己保護的な動機、向社会的な動機、それぞれ測定)、感情表出の調整に関する知識 (Expression Regulation Knowledge、例えば、見せかけの感情と、本当の感情の違いについての理解)について測定し、その関連について検討している。結果として、5歳時の感情的視点取得能力は4年後の社会的表示規則 (Social display rules) の使用で、とりわけ自己保護的な動機による社会的表示規則 (Social display rules) 使用と負の関連が認められた。

また、McDowell & Parke³⁰⁾は小学3年生について社会的表示規則 (Social display rules) の種類 (ポジティブ、ネガティブ) についても検討を行い、ポジティブな感情だけではなく、ネガティブな感情も適切に社会的表示規則 (Social display rules) に沿って用いることができれば、教師や友人からの評価は高いということを示している。

実験場面を用いた研究として、McDowell, O'Neil, & Parke⁶⁾は、社会的表示規則 (Social display rules) の使用が感情統制能力を示す指標であるとして、社会的表示規則 (Social display rules) の使用が学校での適応行動を予測することを明らかにしている。被験者としては、小学4年生であり、測定内容としては、ネガティブな感情への反応とコーピング、ネガティブな状況での社会的表示規則 (Social display rules) の使用についてである。

課題としては、怒り、フラストレーションを喚起する仮想場面を5つ提示し、そのときにどのようなコーピングストラテジーを用いるかについて質問している。さらに、その状

況で感じる感情の強さ、感情が喚起されるまでの時間 (Latency)、なだまりやすさ (ease of calming) について10点満点で得点化させ、加えてその状況で怒りや悲しみをどれくらい感じるかについて、7件法で子どもに評定させている。それに加えて、社会的表示規則 (Social display rules) の実験として、子どもは3回実験室を訪れ、1回目は実験に参加すれば以降、終了後お礼がもらえるとだけ伝えられ、2回目は、インタビュー終了後、年齢相応のおもちゃがもらえるが、それを取り上げられた時のリアクションが録画される。そして、3回目に実験室を訪れた際に、それを返してあげると実験者は約束する。3回目のセッションでは、実験者は年齢や性別に即していないおもちゃが入ったバックを子どもに渡し、そのときの子どもの反応が録画され、2回目、3回目のセッションでの子どもの様子がコード化される。その他の測定尺度としては、子どもの社会的コンピテンスについて教師によりクラス内行動が評定され、ソシオメトリックインタビューが実施された。

結果として、ネガティブなコーピングスタイルの報告と、社会的表示規則 (Social display rules) の使用には、負の相関がみられた。また、女兒の方がネガティブな感情に対し、効果的なコーピングを用いることができることが明らかとなった。そして、より適切に社会的表示規則 (Social display rules) を用いることができるほど、教師や友人から、社会的コンピテンスがあると評価されることが明らかとなった。

Ⅲ まとめ

以上、社会的表示規則 (Social display rules) について、従来なされてきた主要な研究について概観し、その他、児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連について、研究のレビューを

行った。以下、今後の研究の展望について考察を行う。

社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動は密接に結び付くことが文献のレビューから明らかとなり、児童の学校場面での向社会的行動を促すには、社会的表示規則 (Social display rules) の獲得を促すことが必要と考えられるが、日本では、児童期における社会的表示規則 (Social display rules) と向社会的行動の関連に関する研究はほとんど行われていない (平林・柏木¹⁰⁾のみ)。

McDowell, O'Neil, & Parke⁶⁾の研究は、小学4年生に対し、社会的表示規則 (Social display rules) と学校での適応行動との関連を明らかにした点は評価できるが、社会的表示規則 (Social display rules) の測定が実験室に3回訪れるという方法で行われており、日本の学校現場で実施するのは困難である。また、Saarni¹²⁾の仮想場面の課題も海外の研究では良く用いられているが、児童一人一人に対し、児童-インタビュアー1対1で4つ物語を提示し、1つの物語につき4つ質問をしている (4×4=16)。統計による量的分析に耐え得るほどのデータを得るということを考えると、複数人インタビュアーがいたとしても、学校現場に負担は大きく、実施することは難しいだろう。よって、日本の学校現場に即した形 (質問紙形式) で社会的表示規則 (Social display rules) の測定を行うことが必要で、児童用の社会的表示規則 (Social display rules) に関する質問紙の開発が必要だろう。

埴³¹⁾は「怒り」、「喜び」、「悲しみ」(既知)、「悲しみ」(未知)についてそれぞれの感情に基づく物語を2つずつ提示し、父親、母親、よく一緒に遊ぶ友人に対して、それぞれの感情をどれくらい見せるかどうか、4件法 (見せる～見せない) で回答を求めている。この課題を社会的表示規則 (Social display rules) を測定するものに改良すること

で (例えば、Saarni¹²⁾ (1979) の仮想場面の課題に基づく物語課題を提示し、それについて喜怒哀楽をどれくらい表出するかについて4件法で回答を求める)、質問紙形式で測定ができる可能性はあるだろう。

また、従来の研究では、感情表出の統制の獲得過程は、「社会的表示規則 (Social display rules) の獲得過程」として捉えられてきたが、社会的表示規則 (Social display rules) は感情の自己統制¹⁰⁾についての知識を促進するが (Matsumoto³²⁾ら)、社会的表示規則 (Social display rules) と感情の自己統制は区別されるべきである (Garner & Hinton³³⁾) と近年述べられるようになった。社会的表示規則 (Social display rules) と感情の自己統制が異なる点は、感情の自己統制は感情に基づいた行動を維持したり、調整し (Rothbart, Ziaie, & O'Boyle³⁴⁾)、個人が自己の内部に喚起された感情を管理したり (manage)、統制 (regulate) する能力である (Matsumoto³²⁾ら)。McDowell, O'Neil, & Parke⁶⁾は、他者を考慮して実際の経験感情とは異なる感情を表出するという社会的表示規則 (Social display rules) の使用が感情統制能力を示す指標であると述べているが、研究者間で見解の相違がみられることが明らかとなった。今後の研究の課題として、両者の定義および測定方法を明確に区別した上で扱っていくことが必要であろう。

付記

本研究は、2012年度新潟青陵大学共同研究費助成を受けている。

引用文献

- 1) 文部科学省. 「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」. <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/08/1296216.htm>.2012.6.14.
- 2) 文部科学省. 「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査結果」. <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/11/1287227.htm>.2012.6.14.
- 3) Dodge KA. Coordinating responses to aversive stimuli: Introduction to a special section on the development of emotion regulation. *Developmental Psychology*. 1989; 25:339-342.
- 4) 伊藤順子. 幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割. *発達心理学研究*. 1997;8(2): 111-120.
- 5) Cassidy J, Parke RD, Butkovsky L et al. Family-peer connections: The roles of emotional expressiveness within the family and children's understanding of emotions. *Child Development*. 1992;63:603-618.
- 6) McDowell DJ, O'Neil R, Parke RD. Display rule application in a disappointing situation and children's emotional reactivity: Relations with social competence. *Merrill-Palmer Quarterly*. 2000;46:306-324.
- 7) 園田菜摘. 感情の発達. 日本児童研究所編『児童心理学の進歩』. 110-133.東京:金子書房;2002.
- 8) 星信子. 感情の発達. 日本児童研究所編『児童心理学の進歩』. 87-109.東京:金子書房;2008.
- 9) Underwood MK. Peer social status and children's understanding of the expression and control of positive and negative emotions. *Merrill-Palmer Quarterly*. 1997;43:610-634.
- 10) 平林秀美, 柏木恵子. 情動表出の制御と対人関係に関する発達的研究. *Human Developmental Research*. 1993;9:25-39.
- 11) Saarni C. An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*. 1984;55:1504-1513.
- 12) Saarni C. Children's Understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*. 1979;15:424-429.
- 13) Cole PM. Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*. 1986;57:1309-1321.
- 14) Josephs IE. Display rule behavior and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*. 1994;18:301-326.
- 15) Harris PL, Donnelly K, Guz GR, et al. Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*. 1986;57:895-909.
- 16) Banerjee R, Yuill N. Children's understanding of self-presentational display rules: Associations with mental-state understanding. *British Journal of Developmental Psychology*. 1999;17:111-124.
- 17) 溝川藍. 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解. *発達心理学研究*. 2007;18(3):174-184.
- 18) 久保ゆかり. 幼児期の感情. 上淵寿編『感情と動機づけの発達心理学』. 65-84.京都:ナカニシヤ出版;2008.
- 19) Gnepp J, Hess DLR. Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*. 1986;22:102-108.
- 20) 樟本千里, 近藤慈恵, 林千津子, 他. 児童の感情表出の制御に関する知識. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部. 2001;50:461-467.
- 21) Jones DC, Abbey B, B Cumberland A. The Development of Display Rule Knowledge: Linkages with Family Expressiveness and Social Competence. *Child Development*. 1998;69:1209-1222.
- 22) Davis T. Gender differences in masking negative emotions: Ability or motivation?. *Developmental Psychology*. 1995;31:660-667.
- 23) Saarni C, 佐藤香. 感情コンピテンスの発達. 26-54.京都:ナカニシヤ出版;2005.

- 24) McDowell DJ, Parke RD. Parental Control and Affect as Predictors of Children's Display Rule Use and Social Competence with Peers. *Social Development*. 2005;14(3):441-457.
- 25) MacCoy CL, Masters JC. The development of children's strategies for the social control of emotion. *Child Development*. 1985;56:1214-1222.
- 26) Strayer J. Children's attributions regarding the situational determinants of emotion in self and others. *Developmental Psychology*. 1986;22(5):649-654.
- 27) Underwood MK, Coie JD, Herbsman CR. Display Rules for Anger and Aggression in School-Age Children. *Child Development*. 1992;63:366-380.
- 28) Garner PW. The Relations of Emotional Role Taking, Affective/Moral Attributions, and Emotional Display Rule Knowledge to Low-Income School-Age Children's Social Competence. *Journal of Applied Developmental Psychology*. 1996;17:19-36.
- 29) Garner PW. Continuity in Emotion Knowledge from Preschool to Middle-Childhood and Relation to Emotion Socialization. *Motivation and Emotion*. 1999;23(4):247-266.
- 30) McDowell DJ, Parke RD. Differential Knowledge of Display Rules for Positive and Negative Emotions: Influences from Parents, Influences on Peers. *Social Development*. 2000;9(4):416-432.
- 31) 埴朋子. 関係性に応じた情動表出. *教育心理学研究*. 1999;47:273-282.
- 32) Matsumoto D, Yoo SH, Hirayama S, et al. Development and validation of a measure of display rule knowledge: The display rule assessment inventory. *Emotion*. 2005;5:23-40.
- 33) Garner PW, Hinton TS. Emotional Display Rules and Emotion Self-Regulation: Associations with Bullying and Victimization in Community-Based After School Programs. *Journal of Community & Applied Social Psychology*. 2010;20:480-496.
- 34) Rothbart MK, Ziaie H, O'Boyle CG. Self-regulation and emotion in infancy. *New Directions in Child and Adolescent Development*. 1992;55:7-23.